

第2部 今も昔も遊び心を刺激し続ける日本の2大電気街

第1章 東京・秋葉原

武田 洋一(旧・亜土電子工業、ADOパーツショップ元店長) Youichi Takeda

秋葉原・地名の由来

江戸時代、下級武士の居住地だった秋葉原も「火事と喧嘩は江戸の華」と言われたように、火事が絶えなかったようです。1869年(明治2年)、神田相生町の大火災で、東京府は火除地の設置を決定。遠州静岡県から火除けの神様「秋葉大権現」を勘定、火除け神社を建立しました。

後に鎮火神社と改められ、秋葉原駅の開業もあって「秋葉原」という名前が定着しました。秋葉神社は現在、台東区松が谷3丁目にあります。

電気街の萌芽と発展

● 戦前

第2次世界大戦の前から、秋葉原には廣瀬無線や山際電気をはじめとしたラジオや部品の卸し売り店がありました。国鉄や都電でのアクセスも良く、地方からの仕入れで賑わっていたようです。1945年(昭和20年)3月の東京大空襲により周辺は焦土と化しました。

● 1945年～1955年(昭和20年代)...

戦後の真空管ブーム

戦後の混乱の中、戦災を免れた小川町から神田須田町境界の「露天商」が真空管を扱うようになります。近隣に東京電機大学があったこともあり、全国各地から仕入れ人が大勢訪れたようです。

そんな折の1949年(昭和24年)、占領軍総司令部GHQは露店廃止令を施行します。秋葉原の有力者が政治交渉を重ねて、代替地として秋葉原駅周辺にラジオストア [2013年(平成25年)に閉店]、ラジオガーデン、東京ラジオデパート(写真1)、ラジオセンター(写真2)、ラジオ会館ができました。露天商は徐々に移転してきて、部品店として集結します。これが今の秋葉原の始まりです。

1951年(昭和26年)の民間ラジオ放送開始を契機に生産力を回復したメーカ製のスーパー式ラジオが大量に秋葉原市場に出回るようになり、完成品ラジオにもブームが到来します。

● 1955年～1965年(昭和30年代)…家電ブーム

秋葉原が電気街として急速に発展したのは、1955年から(昭和30年代)の神武景気時代です。三種の神器と呼ばれた白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫が飛ぶように売れ(写真3)、1965年から(昭和40年代)の高度経済成長期では、新三種の神器となるカラー・テレビ、クーラー(エアコン)、ステレオなど家電ブームが起こります。

● 1965年～(昭和40年代)…分野別マニアの時代

真空管からトランジスタ、IC、マイクロプロセッサ、パーソナル・コンピュータといった部品中心に発展した時期でもあり、秋葉原に集まる人たちの興味対象は、家電以外にもラジオからテレビ、オーディオ、無線などに広がります。



写真1 1950年(昭和25年)ラジオデパート竣工。木造2階建てに約33店舗が営業していた



写真2 秋葉原電気街の始まり...1951年(昭和26年)の秋葉原ラジオセンター前の中央通りを渡る牛車